

## 作品紹介——

### 《蒔絵重箱入 発掘品類集》の考古資料—鍬形石—

細川 晋太郎

#### 1. はじめに

当館にはいくつかの考古資料が収蔵されている。これまで一部については知られていたが、その内容の多くは2017年に当館で開催された展覧会『古代の造形—モノづくり日本の原点』〔宮内庁書陵部・宮内庁三の丸尚蔵館2017〕で広く知られることとなった。そのなかに、ヒスイ製勾玉や石鍬、青銅鏡をはじめとする銅製品、古墳時代の石製品などの発掘品が収められた蒔絵重箱がある(図1)。この《蒔絵重箱入 発掘品類集》に収められた資料個々の来歴については不明であるものの、考古学的に重要な資料が含まれている。

本稿では、そのうち古墳時代前期の墳墓に副葬される石製品である、鍬形石について作品紹介を行う。あわせて他の古墳出土事例と比較検討し、その位置づけを明らかにしたい。



図1 蒔絵重箱入 発掘品類集

#### 2. 蒔絵重箱内の鍬形石 (カラー口絵32・図2)

##### 現状

淡い緑色を呈する軟質の緑色凝灰岩を用いている<sup>(註1)</sup>。全体的に風化が進んでいるものの、丁寧な研磨が施されており、表面には光沢が認められる。笠状部および板状部などの一部に欠損があるものの、全体として遺存状態は良好といえる。部分的に赤みを帯びた土あるいは粘土のようなものが付着しており、本例が出土品であることを示唆している。

##### 法量・形態

最大長16.9cm、板状部の下端幅10.1cm、最大厚2.1cm、内孔の長径6.8cm、内孔の短径4.7cmである。重量は232.1gである。

笠状部は台形状を呈し、下辺は左右に小さく張り出す。中央には2条の凸線がある。笠状部の裏面は平滑で、環体部との段差や線刻による境界などは作り出されていない。

環体部内孔の形は楕円形で、傾きはほとんどない。内孔の側面には、縦方向および斜め方向の研磨痕がある。なお、現状では回転工具による穿孔の痕跡は認められない。環体部の左右の断面は、いずれも外側面が弧状を呈し、内孔側は上方がやや張り出す形となる。上下の断面においても内孔側の形状は同様である。

突起部はほぼ水平で、張り出しも弱く、環体部内孔の下方に位置している。突起部から板状部の肩にかけて匙面と凸線を組み合わせた表現が施されており、それは裏面にまで及んでいる。なお、表側では突起部上方にやや幅広の匙面装飾があるが、裏面にはない。突起部の断面はほぼ長方形で、特に外側は明瞭に角がある。また、その厚みは笠状部に比べて薄い作りとなっている。

板状部は左右および下辺が直線状で、下辺中央には二つの屈曲をもつ割り込みがある。板状部の下辺側には、突起部と同じく匙面と凸線を組み合わせた表現が3条ある。ただし、突起部および環体部内孔の下方とは異なり、側面や裏側には表現が及ばない。板状部は反りをもっており、側面からみた場合、その先端は突起部よりも低い位置にある。

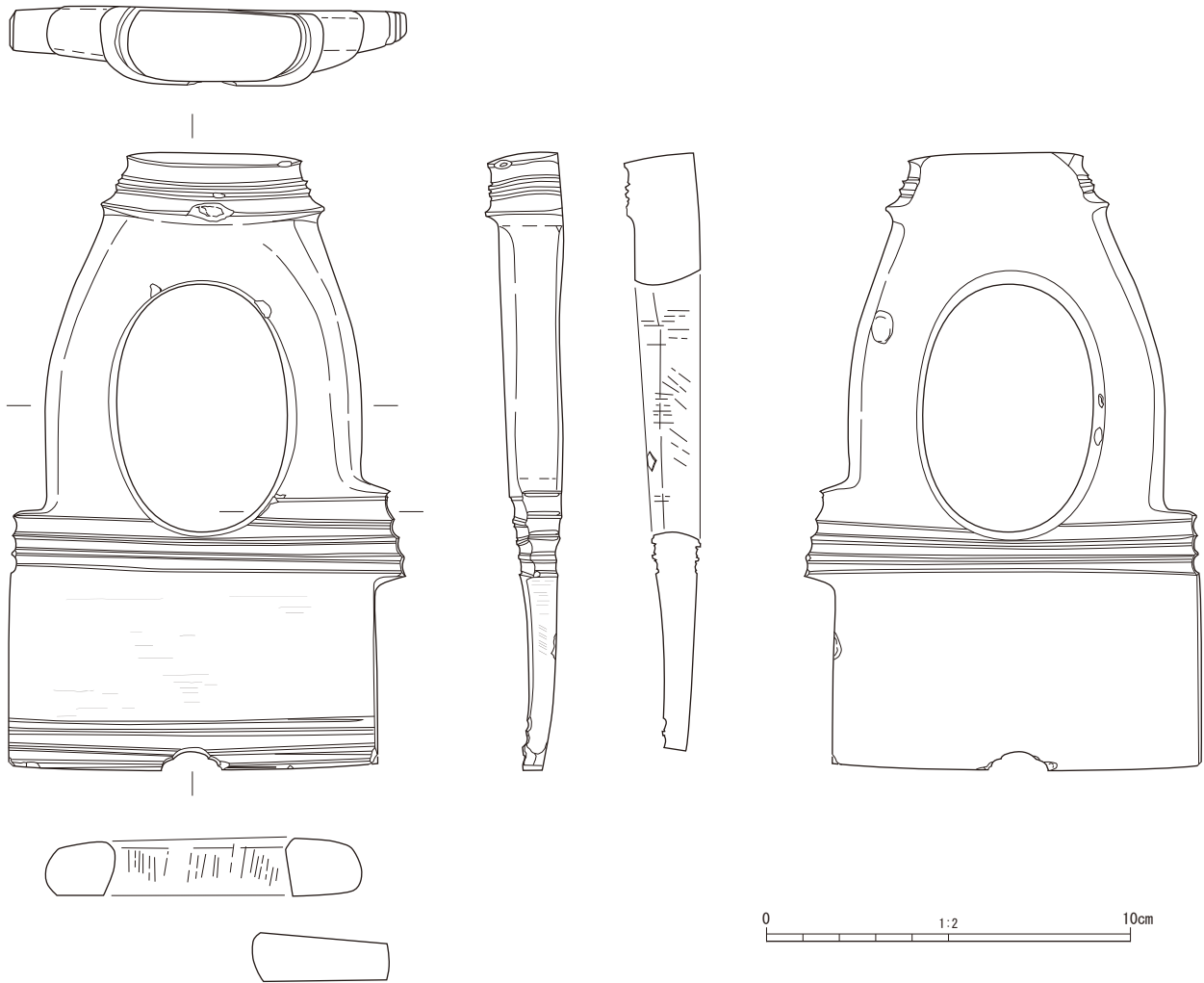


図2 鍬形石実測図

### 3. 三の丸尚蔵館例の特徴および類例との比較 (図3)

三の丸尚蔵館例の観察結果は以上の通りであるが、鍬形石全体のなかで本例を位置づけるにあたり、改めて形態的特徴を整理しておく、以下の点を挙げる。

- ① 笠状部および環体部内孔の傾きがほとんどなく、突起部を除くと、全体の形状がほぼ左右対称になる。
- ② 裏側には笠状部の表現はなく、平滑な作りである。また、貝輪を範とする水管溝表現も存在しない。
- ③ 環体部内孔の断面は、内側にやや張り出す形状である。
- ④ 突起部の位置が内孔の下方に位置し、さらに匙面と凸線を組み合わせた表現が表裏に施される。
- ⑤ 板状部下方に匙面と凸線を組み合わせた表現が施される。
- ⑥ 板状部下端中央に刳り込みがある。

これらの特徴をもとに他の鍬形石と比較検討することになるが、本例とまったく同じ形態的特徴を備えているものはない。しかし、こうした特徴を部分的に備えた類例は存在する。よって、本例の位置づけを考えるにあたり有効と思われる資料を選び出し、それらと比較してみたい。

#### 北和城南古墳出土例 (図3-1)

三の丸尚蔵館例の特徴①②③④を備える事例である。特徴②のうち笠状部の裏側に水管溝表現がある点、そして装飾表現などに違いはあるものの、これまで確認されている鍬形石のなかでも比較的共通点が多くみられる。ただし、北和城南古墳出土(裁27)例は突起部下半から板状部下方にかけて欠損していることから、元の形状はわからない。三の丸尚蔵館例と同じように板状部下端中央の刳り込みや匙面などの装飾が施されていた可能性はあるが、推測の域を出ない。しかし石材の材質は、風化しやすい軟質の緑色凝灰岩が用いられており、その点に

においても共通点が認められる。

#### 島の山古墳前方部出土例（図3-2）

鍬形石のなかでも加飾の多いもので、一見すると三の丸尚蔵館例との印象の違いが際立つが、先に挙げた特徴の①③④⑤を概ね認めうる。笠状部から環体部内孔下方にかけて匙面や線刻による装飾表現が施されており、三の丸尚蔵館例とは乖離しているものの、④として挙げた特徴と共通する要素である点は首肯できよう。また、匙面中央に線刻を入れるなど装飾表現は異なるが、板状部下方に横方向の装飾を施す点も⑤と共通性のある要素とみてよい。なお、石材の材質は軟質の緑色凝灰岩で、縞状の筋が入る。

#### (伝) 巢山古墳出土例（図3-3）

上半部分が欠損しており、笠状部の形状などはわからない。しかし、残存部分の状況からは、全体が左右対称となる形であったと考えてよいだろう。この個体と三の丸尚蔵館例の共通点といえば、それはやはり⑥として挙げた板状部下端中央に作りだされた割り込みである。割り込みの左右に屈曲があることも共通しており、造作における強い意図を感じさせる。もはや形態的乖離が著しいが、形骸化しつつある突起部の位置が環体部内孔の下方に位置し、装飾表現が表裏に施される点や板状部に装飾が表現される点などに共通性を認めうる。

以上の他にも形態的に共通性のある類例として、東大寺山古墳出土例<sup>(註2)</sup>や板状部下端に割り込みがある(伝)島の山古墳出土品〔小島1970〕、江口治郎氏蔵品〔梅原1971〕などが挙げられる。

#### 4. 三の丸尚蔵館例の型式学的位置（図4）

これまでの検討により、三の丸尚蔵館例の形態的特徴は、形の異なる複数の鍬形石で部分的に共通していることが確認された。それは鍬形石の型式間、あるいは系統間を繋ぐ資料である可能性が高いことを示している。

ここでは先行研究の成果に照らして、本例の型式学的位置づけを検討する。参照するのは、鍬形石の変遷案を提示している蒲原宏行氏〔蒲原1991〕、櫻井久之氏〔櫻井1991〕、北條芳隆氏〔北條1994〕の研究成果である（図4）。なお、櫻井氏および北

1. 北和城南古墳出土（奈良博 2017、資料番号裁 27）

2. 島の山古墳出土（榎考研 2019、資料番号鍬形石 98）

3. (伝) 巢山古墳出土（福尾・徳田 1991、資料番号第 11 図 -2）

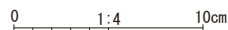


図3 三の丸尚蔵館例と共通する特徴がある類例（各報告書より引用）

2. 櫻井久之〔1991〕による変遷案（傍系突起式）

1. 蒲原宏行〔1991〕による変遷案

3. 北條芳隆〔1994〕による変遷案（第2群鋤形石）

図4 先行研究における鋤形石の変遷案（各氏論考より引用）

條氏の図面は、各氏が鋳形石を2系統に分類したうち、本例と関連性があると考えられる一方の変遷図のみを引用した。各氏の研究成果に基づいて、改めて三の丸尚蔵館例を見てみよう。

蒲原氏の論考においては、大別4類3期区分で鋳形石の変遷案が提示されており、比較資料として先に挙げた類例と共通性のある事例は3期に位置づけられている(図4-1)。なかでも、板状部下端中央に刳り込みがある(伝)島の山古墳出土例〔小島1970〕は最新段階の3C期とされている。三の丸尚蔵館例と共通する要素ではあるが、加飾の状況には顕著な差がある。そのため蒲原氏の分類によるならば、三の丸尚蔵館例はIV類の3Bもしくは3C期、あるいはその中間に位置づけられると思われる。

櫻井氏は鋳形石を直系突起式と傍系突起式の2系統に分類した。類例として先に挙げたものは後者の系統に属している(図4-2)。図面には掲載されていないが、論考にある鋳形石の形態一覧表によると、板状部下端に刳り込みがある(伝)巢山古墳出土例(図3-3)は傍系突起式内のⅢ段階とされている。そうしたなかで三の丸尚蔵館例の位置づけを試みるならば、突起部があることから左右対称ではないため、傍系突起式のⅡ段階に該当すると考えられる。

北條氏の論考では、鋳形石を第1群と第2群に分類している。板状部下方に横方向の装飾がある例は、第2群とされた鋳形石のなかでも主にB類に分けられており、先に類例として挙げた北和城南古墳(裁27)例も第2群B類の第4段階に位置づけられている(図4-3)。対して、(伝)巢山古墳出土品には板状部下端の中央に刳り込みがあり、本例と強い共通性が見いだせる。本例には突起部があり左右対称ではない点を考慮しつつ、北條氏の分類案に位置づけるならば、第2群B類の第4段階に該当すると思われる。

以上のように、三の丸尚蔵館例を先行研究の成果に照らすと、鋳形石のなかでも型式学的に新しい段階に属していることがわかる。鋳形石の大きな変化の方向性からしても、相対的に見て本例が新相に属することに異論はないであろう。そして何より重要なのは、類例との比較を通して明らかのように、本例が鋳形石の型式間を繋ぐ資料であるということである。これまで提示されてきた鋳形石の型式組列のなかで埋まっていなかった部分、ともいえよう。特に今回、板状部下端中央に刳り込みを設ける事例が新たに確認されたことは特筆される。これまで鋳形石の編年では、最終段階において板状部下端中央にある刳り込みをもつ(伝)巢山古墳出土例(図3-3)のような事例が現れていたが、それよりも型式学的に先行するかたちで前段階から存在していたことが明らかになった点は重要である。先に述べたように、三の丸尚蔵館例と(伝)巢山古墳出土例にある板状部下端中央の刳り込みは左右に屈曲を設けている点でも共通しており、その関係性の近さが認められる。変遷の時間幅を考慮しなければならぬが、先行研究のいずれに照らしても同一系統内における一段階違いの前後関係であることから、両者の間では「板状部下端に刳り込みを入れる」という製作における情報の伝達・共有がなされていた可能性が高い。それは鋳形石を製作した工人あるいは工人集団の関係性を表しているものといえる。板状部の下端中央に刳り込みを入れるという要素が何に起因しているのかは明らかにできないものの、今回、三の丸尚蔵館例が追加されたことにより、蒲原氏の変遷案でいうところのIV類3期段階の様相、櫻井氏の変遷案でいうところの傍系突起式Ⅱ段階とⅢ段階の資料の関係性、そして北條氏の変遷案による第2群A類と第2群B類の資料群との関係性が、これまでよりも少し明確になったのではないだろうか。

ところで、三の丸尚蔵館例とは異なる系統、すなわち櫻井氏による直系突起式〔櫻井1991〕および北條氏による第1群鋳形石〔北條1994〕に該当するものになるが、石山古墳西柳から出土した板状部の3辺に鱗状突起をもつ事例は注目される〔京都大学文学部博物館1993〕。特にその板状部下端についた左右対称の鱗状突起は、三の丸尚蔵館例や(伝)巢山古墳出土例の板状部下端中央にある刳り込みを連想させる<sup>(註3)</sup>。いずれも新しい段階に位置づけられる資料であり、今後その関係性を整理する必要があるだろう。

このように、当館所蔵《蒔絵重箱入 発掘品類集》の鋳形石は、古墳時代前期の代表的な墳墓副葬品である鋳形石の編年そして生産状況を復元するうえで欠かすことのできない事例であるといえる。

## 5. おわりに

今回、《蒔絵重箱入 発掘品類集》の中から鋳形石をとりあげ、紹介および検討を行った。これまでその実態が不明であったが、資料各面の写真および実測図を提示したことにより、研究資料として俎上にあげることができたと思う。そして先行研究の成果を踏まえながら検討を行った結果、本例はこれまで公表されてきた資料のなかでも類例の少ないものであり、鋳形石の編年上では相対的に新しい段階のものに該当することが明らかとなった。また、本例は鋳形石の型式間あるいは系統間を繋ぐ要素を含むことから、鋳形石の変遷を把握するうえで欠かす



ことができないものと考えられる。出土地が不明であることは惜しまれるが、石材の材質や表面に付着した土の状況を観察したところでは、他の鍬形石と同じく、古墳副葬品として埋納されたものとみてよいであろう。一例ではあるものの、鍬形石の新資料として追加できた意義は大きく、今後、石製品研究の一助となることが期待される。

#### 註

- (1) 岩石の種類や石材産地の科学的検討は実施できていない。なお、石製品研究の成果に依拠すると、北條芳隆氏の分類による材質2〔北條1994〕、岡寺良氏の材質分類による材質Ⅲに該当する〔岡寺1999〕。
- (2) 『東大寺山古墳の研究』〔東大寺山古墳研究会ほか2010〕に掲載の資料番号鍬形石24など。
- (3) 北條芳隆氏は、石山古墳西柳出土例にみられる鱗状突起、そして(伝)巢山古墳出土例(図3-3)の板状部下端の状況を鱗状突起と捉え、その出現については外部からの影響を想定している〔北條1994〕。

#### 引用および参考文献

梅原末治『日本古玉器雑攻』吉川弘文館、1971

岡寺 良「石製品研究の新視点—材質・製作技法に着目した視点—」『月刊考古学ジャーナル』453、ニューサイエンス社、1999

小田木治太郎「6. 鍬形石の類似品群について—東大寺山古墳出土品から—」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学付属天理参考館、2010

蒲原宏行「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣、1991

京都大学文学部博物館『紫金山古墳と石山古墳』、1993

宮内庁書陵部・宮内庁三の丸尚蔵館『古代の造形—モノづくり日本の原点』三の丸尚蔵館展覧会図録No.78、2017

小島俊次「考古学」『川西村史』川西村教育委員会、1970

櫻井久之「鍬形石の系譜と流通」『考古学雑誌』第77巻第2号 日本考古学会、1991

東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学付属天理参考館『東大寺山古墳の研究』、2010

中井正幸「附編1 矢道長塚古墳出土遺物報告」『大垣市史 考古編』大垣市、2001

奈良県立橿原考古学研究所『島の山古墳—前方部埋葬施設の調査—』、2019

奈良国立博物館『北和城南古墳出土品調査報告』、2017

福尾正彦・徳田誠志「書陵部所蔵の石製品Ⅰ」『書陵部紀要』第42号 宮内庁書陵部、1991

北條芳隆「鍬形石の型式学的研究」『考古学雑誌』第79巻第4号 日本考古学会、1994

三重県埋蔵文化財センター『石山古墳』、2005



- ・三の丸尚蔵館年報・紀要中、作品名や作者、制作年などの表記は、年報・紀要発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館年報・紀要の著作権は宮内庁に属し、本ファイルを改変、再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館年報・紀要（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は、書籍と同様に<sup>1</sup>出典を明記してください。また、図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は、宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお、図版を営利目的の販売品や広告、また個人的な目的等で使用することはできません。

三の丸尚蔵館年報・紀要

第28号

令和3年度

編集：東京都千代田区千代田1-1

宮内庁三の丸尚蔵館

発行：宮内庁

制作：札幌市中央区北3条東5丁目5番地91

株式会社アイワード

翻訳：山口敏之（株式会社イー・シー・プロ）

令和4年12月23日発行